

図8：神経症の主体における四つのディスクール（1）

from #ex.2

#8.1

神経症的な欲望の主体が対象aを
「（〈父〉により解決される）問題」

from #7.19

とするとき、
→ 主体はその問題に対して
「（〈父〉という）根拠」と
「（問題が解決された結果である）結論」が
存在すると信じている。

#8.2

このように解釈をするとき、

- ・ a:
対象あるいは残余a。
転じて、予測誤差としての不確実性、
加えて、そこにファルスが与えられるべきとされるもの
- ・ \$:
欲望の主体。対象aの解消を試みてシニフィアンを操作する
- ・ S1:
象徴的父。転じて、
シニフィアンを連鎖させて構築する「言説」の根拠であり、
根拠の選択の仕方により規定される
「問いの枠組み（プロブレマティク）」
- ・ S2:
象徴的父がもたらす法。転じて、言説の結論であり、
問いの枠組みにおいて根拠に従属する諸命題
の四つの要素を用いて、
神経症者の思考や行動を表現する
右記の「四つのディスクール」を描くことができる。

to #9.1

to #8.4

#8.3

四つのディスクールを構成する
各位置には、
右のような役割がある。

- ・ 主体が当初
同一化しているものが
真理である
- ・ 真理には十全でないところがあり、
それが動因を発生させる
- ・ 動因は他者に働きかけ、他者は生産物を算出する
- ・ 生産物は真理を十全にすべく生じたものだが、
それは実現しない

